2017／秋

季刊 福井県和紙工業協同組合

和紙だより

■目次

越前和紙への提言　竹中健司さん……1頁
取組紹介　東大襖クラブ×長田製紙所……3頁
レポート「福井クラフトツーリズム」開催……3頁
特別展　和紙の真髄―越前奉書の世界―……4頁
和紙ミニコーナー　情報欄……4頁

―越前和紙への提言―

■竹中 健司（たけなか けんじ）
竹中木版五代目摺師、木版画作家、「竹笹堂」代表取締役兼クリエイティブディレクター。四代目竹中清八に幼少の頃より指導を受け、木版印刷の技術を習得。1999年「竹笹堂」を設立。木版画教室を開催する他、オリジナル作品や小物の販売、世界各国で木版印刷の調査、文化財復刻プロジェクトなどを行う。京都木版画工芸組合副理事、京都版画出版協同組合理事、文化庁選定浮世絵木版画彫摺技術保存協会理事、美術大学で教鞭をふるうなど、木版印刷の研究・保存・継承に尽力している。

■竹中健司さん（「竹中木版 竹笹堂」代表、木版摺師）

「過去の技法は未来につながる」

●木版とはいかなる技法か？

日本の木版印刷で現存する一番古いものは、仏教経典「百万塔陀羅尼」（七七〇年）です。平安時代には、経典の普及に手摺りの「摺経供養」が流行し、木版による印刷が多く行われました。僧が弟子や人々に配るスタンプのような「摺仏（すりぼとけ）」も摺られました。鎌倉、室町時代には、奈良・京都を中心に寺院が経典や漢文学を木版印刷し、「出版事業」の産業形態をとる契機となりました。江戸時代になると、大衆文化の興隆と共に技術革新が行われ、商業的にも高水準の独自技術が培われました。

趣ある京町屋の工房兼お店

本の挿絵の部分が独立して浮世絵になってくるのですが、写真のない時代に、庶民の旅行案内に「五十三次」や「富岳」が作られ、美人画や役者絵は今のブロマイドですね。京都の場合は襖唐紙でも団扇でも、手でそんなに触りませんが、江戸の浮世絵は手で持って楽しむため、絵の具が手についてはいけないのです。紙の中に絵の具をキュッと摺りこんで、触っても絵の具が落ちないようにしなくてはいけない。紙の中に浸み込ませることによって、濃いようでも独特の透明感のある発色が得られます。色が多いと色落ちするし、色は少なめに作る方が儲かります。色を少なくするとデザインを秀逸なものにしなければならないので、構図も大胆になる。大量の商業印刷物を限られた時間と費用で生産するために、なるべく少ない版木で最大の効果が得られるように工夫されているのです。さらに制作工程も特化させ、「絵師」「彫師」「摺師」という専門職の分業体制が確立しました。それぞれ習得には時間のかかる技術ですが、例えば、彫師は絵柄を筆で描いたように彫ることができます。

●埋もれた技術を再発見

竹笹堂では、美博物館や大学の歴史ある古木版画や古版木の調査・復刻・修復再生を行う他、産学協同や海外の美博物館とのプロジェクトも積極的に行っています。江戸時代の版木は世界中に散逸していて、古い版木を持っている美術館もありますので、そういう所と復刻共同プロジェクトを行います。プロジェクト起こしは、私が色々情報を調べ、興味が湧いたテーマをタイミングを見計らって様々な所に持ちかけます。基本的に木版に関することなら何でもやってみたい。歴史の中に埋もれ、忘れ去られた技術も多くあり、復刻作業はとても貴重な技法・情報蓄積となります。今までにもフランスの公文書館やアジアの木版技術を探るプロジェクトなどを行いました。いろんな分野の先生が相談に来られますので、私はさしずめ情報交差点のような位置にいるわけです。現在、江戸期に作られた活字印刷本「嵯峨本」の復刻を手がけています。西洋のように木の活字ピースを作り、それを並べて印刷するのですが、日本語は漢字、仮名と文字の種類が多く、文字の流れも考えて並べなくてはいけないので、大変手間がかかります。江戸の瓦版などは毎日の印刷なので、版木印刷の方がはるかに効率的です。歴史的に埋もれている技術にはヒントも多く、日常の仕事にも歴史の重みと面白いストーリーを付け加えることができます。放っておくと廃れていく伝統技法ですので、プロジェクトにはスタッフを参加させ、後継者作りを意識しています。工房の六代目、原田裕子さんは、木版の深い技術を習得したので、血筋にこだわらず指名しました。

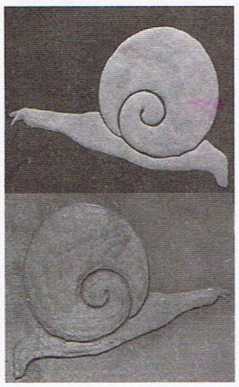
江戸期の版木、四国八十八ヶ所霊場第四十五番札所・岩屋寺のご本尊「不動明王像」の新調復刻例

暖かい風合いが人気のオリジナル商品
写真：©たやまりこ

●和紙技法も大学・美博物館へシフトしては

木版印刷は和紙と共に歩んできた技術です。江戸期には何版もの摺りに耐えるように、紙屋さんも工夫し丈夫な紙を考案していった。現在主に作品に使用する和紙は、越前の市兵衛さん、山口荘八さんの紙で、最も使うのが「大錦判」（約39cm×26.5cm）と言われるサイズ。なかなか浮世絵にあった紙が少ないのですが、いろんな産地の紙を商品によって使い分けします。手漉きは直で仕入れることが多く、組合や、問屋さんからも仕入れます。みんなが共存できるように、いろんなところから仕入れる。父からもそう教えられてきました。版木の桜材は将来を見越して花背で植林していくつもりです。

先日は愛媛県西条市の「周桑和紙」の産地を見てきました。和紙の漉き方も産地で少しずつ違い、均一化されると面白くないので、誰か学んで、伝えて、その技術を保って欲しいですね。どこか他の産地に失われた技術が伝わっているというのでもいい。産地に蓄積された和紙の昔の技法も、相手を大学や美術館にシフトさせ、資料を残せるようにした方がいいと思います。国内だけでなく、世界的に見ても日本の工芸技術を扱っている所は多くあり、欲しがる所はいっぱいあります。伝統技術の多くは近代技術に置き換わりますが、トップの方は少数精鋭で昔のものをきちんと残し、いいものを作るという具合になっていくのではないでしょうか。



「メゾン・エ・オブジェ」（2018年1月開催）見本市用に開発した凸凹のある「敷瓦」

■襖貼り替え合宿で本格襖技術継承
―東大襖クラブ×長田製紙所

東京大学の一風変わったサークル「東大襖クラブ」は、今年九月十日～十四日、襖紙を製造する越前市大滝町の長田製紙所で四泊五日の襖張り合宿を行った。同クラブ部長の佐々木悠さんに今回の取組の目的、成果などを伺った。

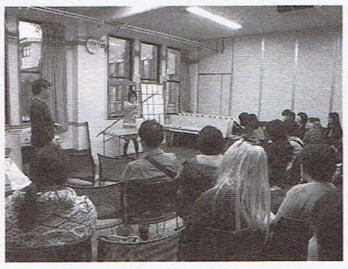
●東大襖クラブの活動

同クラブは、一九五四年創部、約六十余年の歴史を誇る。「昔は襖も表具屋さんに頼まず、自分達で張替える人が多かったので、張替え方を知らない人のためにキャンパスで実演し、教える代わりにうちの紙を買ってくださいというようなものだったらしい」と佐々木さんは先輩から聞いた話を語る。クラブ初期メンバーの実家が紙屋さんだった縁で、襖紙を仕入れて売るようになり、襖張りは付属サービスのようなものだったという。

合宿に参加した皆さんと長田さん

張替え依頼はピークの一九八〇～九〇年頃には、年間一〇〇〇件くらいあったが、現在は障子張替えも含め、一〇〇件程度。依頼を受けると、まずお宅へ伺い、紙の柄選び、襖・障子の採寸、作業スペースなどを確認した上で、見積りを作成。後日、紙と道具を携え、何人かで張替え作業に出向き、作業後に支払いとなる（往復交通費、宿泊費は別途）。料金は通常の五～七割程度、手間賃と紙代実費は分けた請求なので、襖紙によりお金をかけたいお寺などには好評だ。

現在部員は、新入生十人、指導と仕事を仕切る二年生以上が十人。毎年四月に新入生勧誘実演会を開き、三回以上講習に来てもらい、まず張替えの仕方を覚えてもらう。面白そうなバイトができるという理由で入ってくる学生も、学生びいきの優しい依頼主が喜ぶ姿を見ると、次第にやりがいを感じるという。先輩の指導の元、八月まで集中的に技能を磨き、テストを受ける。角にシワがなく、紙が毛羽立っていないか、ノリがはみ出してはいないかなど、お客様の家で貼っても申し分のない程度の技能を身につければ「合格」となり、仕事ができる。



新入生勧誘風景と部室

●合宿で伝統襖を学ぶ

今回合宿を受け入れてくれたのは、襖紙の一大生産地越前で、手漉き襖紙を生産してきた長田製紙所。社長の長田和也さんとは、ここ二年ほど交流を続けてきたが、部員の中から一緒に何かできないかという声が次第に上がっていた。昨今は襖のない家も多く、依頼のほとんどが簡易的な襖に機械抄きの紙を張るもので、手漉き和紙や本格的な襖を張る機会は年にせいぜい一～二件。伝統的襖の知識や技術を後輩に継承しづらい問題を抱えていた。越前には、まだまだ伝統襖のある家屋も多く、産地の手漉き紙を使って、昔ながらの技術を学ぶことができると考えた。九人の部員が近くの安楽寺に五日間寝泊りしながら、長田家、お寺、知人宅の襖五二面、障子十二面を張替えた。

彼らをお世話した長田泉さんは、「何しろ段取りがいいので、まず驚いた」と言う。というのも、同クラブは襖を持って帰って張替るのではなく、空間や作業条件の限られた依頼先の家の中で張替えるため、リーダーが仕切り、指示に従ってみんながテキパキと動く作業方法に慣れているからだ。

金属釘を使わない「印籠襖」や越前では「吉原襖」と呼ばれる、明り採りのある中抜きの襖「源氏襖」なども初めて手がけた。特殊な組み方がしてあるので、枠を外す作業は地元の材料屋さんが手解きしてくれた。又、長田製紙所ではこの交流を記念して「昭和の襖紙」を八種類復刻した。

手漉き和紙の扱い方、高級材料でできた伝統襖の骨組みや構造を学んだ部員は「ハードだったがとても楽しく充実した合宿だった」と感想を述べた。

昭和四十年代に人気のあった、復刻した「昭和の襖紙」

●良い刺激剤になる交流を目指して

同クラブでは襖の柄選びのために、約四十冊の見本帳・カタログを所持している。最近はモダンな襖が欲しいという人が多く、襖＝和室と捉えるのではなく、洋室にも合う襖にも目を

向けて欲しいと佐々木さんは言う。

「インテリアの中で主張しすぎないよう、白っぽい無難な色の鳥子紙もあるのを知って欲しいですね。又、個人的には縁のない『太鼓襖』や『袖張り』『細工張り』などの張り方は、ガラッと雰囲気が変えられ、洋室にもよく合うと思っています。学園祭などでは、そういう襖を制作して見ていただくようにしています。」

襖は日本人の自然観を表すなど、建築史においても文化的な意味合いがあるが、現在「なぜ襖が良いのか？手漉きの襖紙はどこが違うのか？」など、納得できる理由が業界からあまり語られることはない。

「今のお客さんは、和紙の調湿作用など、科学的な根拠や文化的な意味合いを明確にアピールすれば、襖を見直すきっかけになると思うのです。私達は和紙屋さん、問屋さんともお付合いがあるので、エンドユーザーとの繋ぎ役や刺激剤として交流できればいいですね」と佐々木さんは語った。

張替え作業風景

レポート

■「福井クラフトツーリズム」開催 RENEW×中川政七商店-越前和紙産地も参加

二〇一五年、越前漆器、眼鏡産業が集積している福井県鯖江市河和田地区で始まった産業観光型・体験型マーケット「RENEW」の実行委員会は、奈良の人気和雑貨工芸メーカー「中川政七商店」とコラボし、今年十月十二～十五日の四日間、福井県各所で工芸品の祭典「大日本一鯖江博覧会×リニュー」を開催した。

「RENEW」は、越前漆器のメーカー、問屋、工房を中心に組織され、持続可能な産地づくりを目指して、過去二回、客と作り手が直接交流するイベントを開催してきた。二〇一六年の来場者数は二〇～四〇代を中心に、約二千人（前年比一・五倍増）、出展者売上総額一四〇万円（前年比五〇％増）と順調に増え、出展者の地元企業六社が直営店をオープンするなど、開催の効果も出始めた。

一方、中川政七商店は、「日本の工芸を元気にする」大日本一博覧会を二〇一六年にスタートさせ、東京ミッドタウン、岩手県盛岡市、長崎県波佐見町、新潟県三条市、奈良市の全国五地域で博覧会を開催。物販だけでなく、トークショー、ワークショップ、レストラン出店などの催しを行い、来場者数延べ七万人以上、工芸の催しとしては日本最大規模の集客力で話題になった。

今回、「RENEW」は、さらなる発展を目指すため、地域を河和田地区から丹南地区の工芸品産地に広げ、中川政七商店の知名度・企画力・集客力の助けを借り、コラボしたものだ。「RENEW×大日本一鯖江博覧会」と銘打たれた鯖江市の参加地域は、河和田の越前漆器・眼鏡エリア、越前和紙エリア、越前打刃物エリア、越前箪笥エリア、眼鏡エリアと福井の食を楽しむ福井駅エリア。

今回初参加の越前和紙エリアでは、越前和紙のメーカー十社（信洋舎製紙所、清水紙工㈱、越前製紙工場、石川製紙、五十嵐製紙、やなせ和紙、長田製紙所、山次製紙所、滝製紙所、RYOZO-柳瀬良三製紙所）、和紙施設（パピルス館、卯立の工芸館、紙の文化博物館）、地元和紙問屋（杉原商店）などが工房見学、体験ワークショップや和紙製品販売などを行った。

近くに住んでいても和紙の工房を見るのは初めてという人や和紙の作り方を習う子供連れの家族客、和紙に興味のある熟年の紳士などが、目立つ赤い旗を目印に地区を回り、工芸産地との直接交流、勉強、観光を兼ねた、一味違う土地の魅力を再発見する催しを楽しんだ。

見所を解説したパンフレット

■紙の文化博物館フルオープン 特別展 和紙の真髄-越前奉書の世界-開催

本年四月八日、越前市の越前和紙の里「紙の文化博物館」一階部分と木造の別館がリニューアルアープンしたのに引き続き、去る九月三十日、同館二階の展示室が完成した。オープン記念として、越前和紙の繁栄を築いた公文書用紙「越前奉書」にまつわる古文書「三田村文書」を始め、大瀧神社の伝来品、重要文化財の和紙製作用具など、計四十点を特別展示。付随して、今回の展示を担った越前市役所産業政策課の礒部宏子学芸員による、二回の古文書講座が開催された。

展示説明を行う礒部宏子学芸員

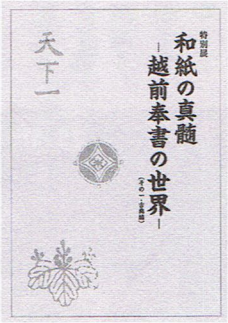
●古文書講座「奉書とはなんだろう」

古代・中世と高位の人物が口頭で発した命令や意向を、下位の者が「うけたまわり」、伝えるために作成された文書を「奉書」と呼ぶ。古くはその文書の働きを「奉書」としていたが、紙そのものを「奉書」と呼ぶのはいつからか定かではない。記録上の「越前奉書」の初出は、奈良大乗院の僧、尋憲の日記『尋憲記』（一五七三年）に見られることから、概ね戦国時代末期にはすでにその地位を確立していたものと思われる。その後、江戸時代に三田村家が越前五箇の御紙屋筆頭となり奉書紙の商いを一手に担い、幕末にいたるまでその繁栄を支えた。

●越前奉書の諸相－展示の見どころ

楮を主原料とする、白くふっくらとした厚手の和紙、奉書は、武家社会で好まれ、公文書用紙としての地位を築いていく。室町時代末期、越前奉書は紙の生産を安定化させるため、戦国武将によって保護された。天正三年（一五七五）に、まず大瀧神郷にあった紙座を保護するため、府中三人衆（前田利家・不破光治・佐々成政）より定書が出されている。

この時期以降に、奉書紙の「にせ紙」が横行していたことが窺える。にせ紙と言っても、原料は同じ楮の白い紙なのだが、御紙屋筆頭の三田村家の印のないものを多量に売りさばく者が出てきた。展示されている古文書には、にせ紙作りを禁じる文書、にせ紙作りが発覚して制裁を受けた紙漉きが、今後一切三田村家を通さず、紙を他所へ流すことはやめるので、これまで通り、皆と共に生産・販売をさせてほしいと願う連名の書状も残る。



特別展を記念して発行された小冊子

社会が安定した江戸期になると、中世の打雲、飛雲などの越前が特産としていた鳥の子紙に使われた加飾技術とともに、絵奉書、五色奉書、透かし入り奉書などが考案され、これらの多様な紙技術は、のちに紙の用途を広げていくのである。

会場には三田村家が所有する、織田信長・豊臣秀吉から拝領したという伝承を持つ印、紙運搬の際に荷にさした葵紋の御用札など珍しい品も展示された。

■クリエイティブ業に向ける和紙講座
－基礎編－開催

ハイセンスな感覚で和紙の使用機会を増やす活動を行っているWACCA JAPANは、去る九月十五日、東京大崎の事務所兼ショールームにて、クリエイティブ業向けの和紙講座を開催した。

森崎さんは「WACCAを設立して、今年で四年目。この間和紙を印刷物やパッケージ等に使ってもらおうと、グラフィックデザイナーの立場で相談に乗ったり、商品開発なども行ってきましたが、いつも感じるのは皆さん和紙のことをあまりにもご存知ないということでした。」和紙の風合いや伝統に強く関心があっても、「和紙らしさ」を活かせる用途や、価格帯が合わないケースがとても多く、まずは和紙のことをきちんと伝えたいという思いが膨らんできたという。

初回は「基礎編」として、和紙の製造方法、種類、素材の特徴（採光性、耐久性、軽量、長寿命、小ロット生産など）をスライドを交えて講義。建築家、アーティスト、印刷会社社員など六名の参加者は、「和紙店では触ることができない原料や様々な産地の手漉き・機械抄き和紙を実際にゆっくり触れることができ、素材理解が深まった」と感想を述べた。次回「応用編」の内容は未定だが、森崎さんはクリエイターに役立つ内容でシリーズ化していきたいと語った。

情報欄

●イベント情報

■第34回伝統的工芸品月間
国民会議全国大会　東京大会
○全国大会・記念式典；平成29年11月2日（木）
東京：池袋「ホテルメトロポリタン」
○第36回全国伝統工芸士大会
11月2日（木）「ホテルメトロポリタン」
○合同懇親会：「ホテルメトロポリタン」

○伝統工芸ふれあい広場
○全国くらしの工芸品展
○日本伝統工芸士会作品展
11月4日（土）～6日（月）「東京国際フォーラム」

■平成30年　越前和紙祈願祭・漉き初め式
時：平成30年1月5日（金）9:00～
場所：卯立の工芸館

■平成30年　新年賀詞交歓会
時：平成30年1月5日（金）11:00～13:00
場所：生涯学習センター今立分館

■第85回東京インターナショナルギフトショー
時：平成30年1月31日（水）～2月3日（土）
場所：東京ビックサイト

■越前和紙展～「越前和紙の美術紙」（仮題）～
時：平成30年2月12日（月）～17日（土）
場所：東京日本橋「小津ギャラリー」

●10月2日、越前鳥の子紙が国の重要無形文化財に指定され、保存会が保存団体として正式認定されました。

●2018年（平成30年）紙祖神を祀る岡太神社・大瀧神社は1300年祭を迎えます。来春5月2日～5日、お祭りの他に様々な催しが行われます。乞うご期待。

1300年大祭のポスター

編集後記
2018年、日仏友好160周年を記念して、パリを中心に大型日本文化紹介企画「ジャポニズム2018」が開催されます。ゴッホやマネなどに多大な影響を与えた日本美術や芸能紹介、又国内でも外国人向けに和紙の体験制作など、文化体験観光を促進する動きが加速しそうです。

季刊・和紙だより 第56号（2017年秋号）　発行日：2017年11月6日　和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人：福井県和紙工業協同組合　石川浩　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所：Office YOMOSA　〒520-0025　滋賀県大津市皇子が丘1-6-6 #209　Tel/Fax: 077-523-4172　E-mail: myomosa@mx5.canvas.ne.jp
編集人：右衛門佐美佐子・田中裕子　印刷所：有限会社新進堂印刷所（京都府宇治市）　用紙：機械漉き大礼紙（石川製紙株式会社製）
※無断での転写・転載はお断りします。